

# 前言

以下の文章は、『日本中国学会第七十四回大会要項』の関連記事を再録したものである。

## 一、趣旨説明

本シンポジウムは学会企画として実施される新たなプログラムであり、本学会会則第3条（事業）第4項所掲の条文「会員の研究に対する援助」をその目的とするものです。主たる「援助」の対象は、本会のいわゆる若手会員です。ただし若手会員の研究支援に言うならば、すでに本会は、二〇一一年三月に「第一回若手シンポジウム」を開催し、そしてそれを発展的に引き継ぐかたちで「次世代シンポジウム」を実施しているわけでして、目的を同じくする企画をなぜ別立てで実施するのかと訝る向きもおられることでしょう。たしかに本企画は、若手支援に関する年来の精神を分け持つものです。とはいえそれとともに、書評活動の活性化という目的をあわせて掲げることにより、若手を含む会員相互の学術交流の場の創成をも目指しています。本シンポジウムを「次世代シンポジウム」から独立したかたちで挙げる理由は、まさしくこの点に存するのですが、こうした試みのより良い形態に関しては、今後、会員各位のご意見をうかがいながら作り上げてゆきたいと思っています。

本シンポジウムはパネルディスカッションの形式で行われます。一点の学術書に対する三名程度の評者と当該の著者および司会者を合わせてパネルを組むこととして、大会参加のパネルを公募するとともに、企画者の側でも二組のパネルを準備しました。本大会では三組のパネルによる書評会を実施します。その概要は次頁以降に掲載しました。

今回策定したパネルの条件は下記のとおりです。学会による活動として本企画の公平性をいかに確保するか、そもそも書評シンポジウムをどのようにして若手支援に繋げるか、といった点を考慮して定めたものです。実施要領等の詳細に関しては『日本中国学会便り』二〇二二年第一号をご覧ください。みなさまの積極的なご参加をお待ち申し上げます。

- 一、パネリストのうち、著者と司会者、および評者二名は本学会の会員資格を有していること。
- 二、書評の対象とする著作は、著者にとってデビュー作に相当する学術書で、二〇一八年〜二〇二〇年に刊行されたもの。評者の年齢は、原則として、当該学術書の著者と同年齢もしくはそれ以下。
- 三、専門領域・所属機関・性別などについて、多様性が考慮されたパネルを歓迎する。

二、パネルの概要

パネルⅠ・福谷彬著『南宋道学の展開』（京都大学学術出版会、二〇一九年三月刊行、本文三五七頁）

宋代に発展した儒教の一派「道学」は、しばしば「程朱学」という言葉と同一視される。「程朱学」という呼称は、北宋期の程頤・程頤兄弟（二程）と南宋期の朱熹の思想を一体と見なす見方を前提としている。しかし、「道学」＝「程朱学」と理解してしまうと歴史の経緯から言えば正しくない。南宋期には朱熹や、時には二程の思想をも批判する様々な思想家が「道学」と称せられたからである。本書は、これまでのように朱熹を道学の思想的発展の頂点とすることを自明とせずに、朱熹を含む様々な学派を総体として「道学」と理解することを試みた。その上で以下の点に注意して考察を加えた。

①胡宏や陳亮、陸九淵といった朱熹と同じく「道学」圏内の人物と目された思想家が、朱熹とどのような点で対立したのかという点。

②従来のように古典注釈や形而上学を単独に論ずるだけでなく、道学者の政治上の活動にも十分注意して、古典注釈・形而上学が彼らの政治的な活動にどのようにつながっていたかを明らかにしようとした点。

本書の考察を通じて、朱熹や陸九淵や陳亮といった当時の道学者は、孝宗末年の道学と反道学の党争時期に、政治的に連帯する側面があったが、反対派にどのように対抗するかという点で方針の相違

があり、その方針の相違は彼らの思想上の隔たりを背景としていることを明らかにした。

パネリスト

評者・岩本真利絵（釧路公立大学。明代政治史、嘉靖〜万暦年間の皇帝と士大夫の思考から）・早川太基（神戸大学。唐宋詩学を中心とした琴棋書画などの文人文化の研究）・陳 佑真（帝京大学。三蘇蜀学の経書解釈を中心とした宋代思想史）  
著者・福谷 彬（京都大学）、司会・三浦秀一（東北大学）

パネルⅡ・福田素子著『債鬼転生——討債鬼故事に見る中国の親子』（知泉書館、二〇一九年一〇月刊行、本文二九七頁）

討債鬼故事とは、中国に現在まで伝わる怪談の一つであり、金を奪われ、又は借金を踏み倒された者が、死後加害者の子に転生して、取り立てるべき額だけ親の金を蕩尽するという話である。本書はこの討債鬼故事という一つの話型について、その萌芽から成立、変容に到るまでを通時的・広域的に、分野を超えて追求し、更に宗教思想的な背景を追究したものである。

第一部では、インドの生命観である輪廻が中国において、本来相容れない復讐という行為と融合し、討債鬼故事の成立に繋がった過程を論じた。第二部では、仏教や道教の儀礼において鎮撫の対象となる孤魂野鬼の一種である「冤家債主」の概念が、復讐譚としての討債鬼故事にもたらした変化を論じた。冤家債主像の変化につれて、討債鬼も怨恨という要素を失い、運命の不条理に苦しむ親の心を慰

撫する話となった。第三部では、日本における討債鬼故事の受容を考えた。日本では背景となる家族制度と経済制度が中国とは異なっていたため、転生の動機や借金の意味が中国とは全く違うものになったのである。補論として、討債鬼故事の誕生と伝播に大きな働きがあり、本文中でも取り上げた偽経『仏頂心陀羅尼経』の成立と信仰形態に関する考察を加えた。

パネリスト

評者・宇野瑞木（専修大学。東アジアの説話文学、特に孝子説話とその図像の研究）・千賀由佳（龍谷大学。明清白話小説中の仏教・民間信仰）・吉田 勉（北海道教育大学釧路校。中国思想史・経書解釈学史）

著者・福田素子（聖学院大学非常勤）、司会・佐野誠子（名古屋大学）

パネルⅢ・田村容子著『男旦（おんながた）とモダンガール——二〇世紀中国における京劇の現代化』（中国文庫、二〇一九年三月刊行、本文三五二頁）

男が女役を演じる「おんながた」、これを中国語で「男旦（ナンタン）」と呼ぶ。中国の伝統劇、といつても一八世紀末から一九世紀にかけて萌芽した、比較的歴史の浅い京劇は、かつては男性ばかりで演じられた。二〇世紀に入ると、女優の登場、劇評の発達、近代劇の流入など、さまざまな変化が京劇界に影響を与える。とくに、女役を演じる俳優の身体が、男性から女性に交代したことは、京劇

の設備と内容の両面にわたる革新と同時に進行し、それぞれと深く関わっていた。本書は、新聞・雑誌に掲載された上演にまつわる記録から、「男旦」の興亡史を手がかりとして、二〇世紀の京劇がたどった現代化の道のりを論じたものである。第五十二回日本演劇学会河竹賞奨励賞受賞。

〈目次紹介〉

序章 男旦はモダンガールをめざす／第一章 清末民初の女芝居／第二章 港からきた女優／第三章 劇評家・辻聴花と女芝居第四章 「鴛鴦蝴蝶派」と上海の遊戯場／第五章 機械仕掛けの舞台／第六章 日本人の描いた京劇第七章 「孤島」期上海と戦時下の演劇／第八章 たたかう女性像の系譜／終章 男旦とモダンガール

パネリスト

評者・菅原慶乃（関西大学。中国語圏映画史）・松浦智子（神奈川大学。中国古典通俗文芸）・宮内 肇（立命館大学。中国近代史）

著者・田村容子（北海道大学）、司会・鈴木将久（東京大学）

## 前言